
IS(インフィニットストラトス)転生した後は・・・

カミュカミュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニットストラトス
IS 転生した後は・・・

【Nコード】

N7212Z

【作者名】

カミュカミュ

【あらすじ】

神によりISの世界に転生された主人公

棗 壘賀（なつめ りょうが）

そんな主人公と一夏達がおりなすストーリー

こんなんでいいの？（前編）（前書き）

自分本当に初めて書くんで、下手かも知れませんが是非読んでください！

「こんなんでいいの? (前編)」

「あれ?」

目が覚めると俺は知らない場所にいた

「なんでこんなところに居るんだ?」

目の前には白い世界が広がっていた

そして、何があったのか思い返してみる。

今日は午後まで家にいて、本屋にいつて欲しかった新刊と集めてる途中の本も買って帰ったはず。

「あつ」

そういえば帰る途中に引かれそうになった猫助けたっけ。

「じゃあ、俺死んだんだ」

「そうだよ」

???なんか後ろから声が聞こえたぞ???

後ろを向くと変な格好したじいさんがいた。

「誰?」

すると、じいさんはこう言った

「わし?神だよ」

なに言っただこのじいさんは？
頭おかしいんじゃないのか？

「そつですか」

「もち」

嘘つけ

「嘘ではない」

「！！」

心が読めるのかこのじいさんは？

「読めるに決まってるだろ、神だから」

「まあいいや」

「ところで、その神様が俺になんのよう？」

「いや、お主のあの勇敢な姿に感動しての、お主にもう一度命をあたえてやるうと思ってるの」

「マジすか！？」

「もちろんじゃ」

「ただし、お主が居た世界は無理じゃからな」

「わかりました。じゃあ少し考えさせてください」

「わかったよ」

それから約二時間・・・

「長い！」

「えっ？」

いきなり神が大声で言ってきた

「お主考えるのがすぎ！！もう、この本の中からワシが決めるから！！」

「別にいいですけど、」

そんなに長いこと考えてたか？

そんな事を考えながら神が出した本は、

バカテス　これゾン　ISの三冊だった

こんなんでいいの？（前編）（後書き）

すみません1話が全部はいりきらなくて前編と後編に分ける事にな
ってしまいました。

それはともかく、感動などをお待ちしていますので是非お願いしま
す。

こんなんでいいの？（後編）（前書き）

いや〜なんか後編にしてやっちゃった感
がありますが、あんまり気にしないでください。

こんなんでいいの？（後編）

バカテス
奴だった

これゾン

ISの三冊は俺が本屋で買った

「じゃあこの中から決めるからな！」

「わかりましたよ、」

はあ〜と俺は小さくため息をする

「よし、じゃあいくぞ〜」

と言ってなぜかサイコロを投げ出した

そしてサイコロが指した目は『IS』と書かれていた

「よし決まったー」

神は嬉しいそうに言った

「それでお主、何か欲しいものはないか？」

「なんでもくれるんですか？」

「もち」

「そうだなISの世界ならとりあえずISに乗れるようにして欲しいのと俺専用のISが欲しい」

「他には無いか？」

「後は・・・とりあえずISが作れるくらいのが天才にして身体能力はんーとまあチートにしといて」

「わかったぞ」

「そんなもんでいいや」

「よし！お主が言ったことは全部やっとしたからこの先に進むがよい」

「サンキュー」

俺は神様にお礼を言って先に進んだ

そしてもう一度お礼を言おうとして神のほうを見たらニヤニヤ笑っていた

悪い予感がした直後下がなくなり俺は落ちた

「このクソじじいいいいー」

「敬意をしめさなかったお主のせいじゃよ」

「そんな事を聞きながらおれは落ちていった」

こんなんでいいの？（後編）（後書き）

なんかとても長い話になってしまいました。どうだったですか？
まあそれは良いとしてメインヒロインはシャルにしようと思っ
ていますが、他のがいいと言ったのは是非感想くださいなるべく早
めに締め切るのでもよろしくお願いします。

いや〜助かった〜で、ニジビニジ〜? (前書き)

いや〜にしてもまた、長くなってしまいましたよ〜参った参った

ね〜皆さん読んでくれます

えっ? 読んで無い、、、、

ひどいよよよよ〜〜〜 (泣)

作者がどうか行ってしまったので本編をどうぞ

「いや、助かったくて、二二二二二!？」

あれ〜、これってヤバくね??

あつても、意外と低いじゃんって言ってもビル6階分ぐらいあるけど。

「さて、どうするかな」

などと陽気に考えていると段々と地面が近ずいてる事に気がついた。ていうか、下に人がいた

それに気がついた俺は下にいる人に

「おーい、どけーいーい」

と思いつ切り叫んだ

「?」

下にいた人は驚いていたみたいだが一応どいてくれた

俺はと言つと着地の時の反動を無くすために

電柱に掴まりながら降りていった。

まあ、ぶつちやけどいてもらいう意味なんて無かったが一応な?

「ふ〜危なかった」

「?」

さっきまで下にいた人もとい少年はポカンとしたまま突っ立っている。まあ、当然だろういきなり上から人が降って来たからな

などと考えて事をしてしていると

「あ〜」

さっきの少年と言うか、俺と同年くらいの子が話しかけて

きた

「大丈夫ですか？」

「えっ？あつ？大丈夫ですよ」

結構高いところから落ちたのに無傷だった
まあ電柱につかまったのもあるが

「それよりここはどこですか？」

「ここですか？ここは俺の家ですけど・・・」

「なるど・・・所で、君は誰？ちなみに俺は

棗 壘賀普通に壘賀って呼んでくれ」

「俺は織斑 一夏俺も一夏でいいぜ」

あれ？こんな所で一夏と会ってしまったがこれはIS学園に入る前か
などと考えていると一夏が

「本当に大丈夫なのか？」

と心配そうに聞いてきた

「ああ大丈夫だって」

「でもお前結構高いところから落ちてきたぞ」

「本当に大丈夫だって。俺結構体丈夫だからな」

「まあ壘賀が大丈夫って言うならいいが・・・」

所でなんで上から落ちてきたんだ？」

などと当然の疑問がかえってきた。上から落ちてきたから当然か

「あゝ実はなちよつと遊んでたら落ちちゃったんだよ」

「どこで遊んでたんだよ!？」

などと思事なツッコミを入れきた。当然か

まあその後も無理矢理一夏を納得させ本題に入った

「どこで一夏？」

「なんだ？」

「お前ん家に当分泊めてくんない？」

「いいけど家の人に連絡しなくていいのか？」

「俺、両親いないんだ。もう、世界しちまった」

「悪い知らないとは言え聞いちまって」

「別に良いよ気にしてないから」

て言っても向こうの世界で訳あって別々に暮らしていただけだけど

「とりあえずお前の家に当分泊めてくれよ」

「良いぜ」

これで当分寝る所にも困らなくなった
とりあえず一夏の家の入ろう

「お邪魔しまーす」

「この家いま俺以外誰もいないから遠慮しないでいいぞ」

「お前の親は仕事に行ってるのか？」
あれ？一夏の顔が少し暗くなったぞ？

「いや、俺は千冬姉と一緒に両親に捨てられたんだ」

あゝそついや原作でそんな事言ってたなマズイこと聞いちゃったな

「悪い一夏、俺も知らずとは言え聞いちゃまって」

「別に良いよ今更りようがなんてどうでもいいし、俺には千冬姉が
居るからな。それにおあいこだろ？」

そつやって一夏は何も気にしてないように言ってくれた

「ていうか、お前姉ちゃんいたのかよ」

「ああ、今はどこに居るかわからないけどな」

「そついや一夏」

「なんだ？」

「俺のこと姉ちゃんに泊まって良いか確認しなくても良いのか？」

「そついやそつだな。一応聞いてみるよ」と言い出し携帯で電話し始めた。

ブルルル

『もしもし？千冬姉？』

『なんだ一夏？』

『実は友達が当分泊めてくれて言ってるけど泊めていい？』

『きちんと親子さんに連絡したのか？』

『実は他界してるんだって』

『．．．分かった泊めてやれ』

『サンキュー千冬姉』

『それと一夏』

『なに？』

『お前4月からES学園に通うんだから、きちんと用意しとけよ』

『わかってるよ。それじゃ千冬姉』

『ああ』

ガチャ

「千冬姉良いつてさ」

「そうか、そりゃあよかった」

「そついや一夏？」

「なんだ？」

「お前IS学園に行くって・・・」

「聞こえてたのか」

「悪い盗み聞きするつもりはなかったんだ」

「わかってるよ。まあIS動かした俺がいけないんだけどな」

「へえ、お前IS動かしたんだ」

「それでよ色々大変だったんだぜ」

などと適当にだべって夕飯を一夏につくってもらい（本人いわく、客人はゆっくりしてほしんだと）お風呂に入り部屋に案内してもらい今日は色んな事があつたのでベットに入ったらすぐに眠った。

次の日の朝、朝食を食べる時に

「なあ一夏」

「なんだ？」

「悪いけどこの街案内してくんない？俺この街初めてでどこに何が

あるかわかんないからさ」

「別にいいぜ」

「じゃあ10時から行こうぜ」

「ああ、いいぜ、それよりお前のその銀のネックレスかつこいいな
どこで買ったんだよ」

「いや、なんか気づいたらついてたんだよ」

「へえ」

などとゆったり話していると

「おっそろそろ時間だいこうぜ」

「ああ」

こうして俺と一夏は街に行った
それから数時間後

「壘賀大体の買い物終わったか？」

「ああ、今日はサンキューな一夏」

「別に良いつてことよ」

と言いつつも時計は4時を指していた

「にしてもだいぶ買ったな」

「しょうがないだろ、なんにも着替えがないんだから」

そう、転生した俺には無論着替えなどなかったが奇跡的に財布とお金ならあった

「にしても買いますぎだっつて」

などと話しているときいきなり目の前に車が

数台止まり中からいきなり人が出て来て一夏と俺をさらおうとしてきた

いや〜助かった〜って、「じいじ〜!?!」(後書き)

いや〜にしてもどうなるんでしょうね〜

壘賀さんー夏さん

「次はとうとう俺のISが登場するぜ」

「いや〜にしてもお前のISかっこよかったな」

「だろ?」

あの〜俺抜きで話しすすめないでくれます

「なに?まだいたの?」

えっ!?!壘賀さんちよっひどくない?

「べっしん〜」

まあいいや、じゃあしめますか

「感想やコメント待ってるぜ」「

いや〜やっど登場かよ？何か遅くね？（前書き）

いや〜にしても前の話で二人は拐われそうになったのだが〜

「何でそんな説明口調なの？」

気にしたら負けだぞ（笑）

「（笑）ってなんだよ！ふざけてんのかよ？」

別にふざけてなんかいませんよ〜

「何かうぜえーーーーー？」

まあまあ、気にせず本編をどうぞ〜

「たくつ、分かった？」

「いくぞー夏？」

「えっ？あつ！わかった？」

「「それではどうぞ」「

いや〜やっど登場かよ？何か遅くね？

「てめえら！なにすんだよ？」

「貴様ら大人しくしろ！」

「チツ？」

いきなり大勢の大人が俺と一夏を襲ってきた

「一夏？捕まるんじゃないぞ？」

「わかつてるよ！」

と、短い会話をして俺と一夏で大人達を倒しにいった

「よっ！はっ！」

手始めに近くにいた男二人を殴り倒した

「小僧？」

おっ怒った怒った怖いね〜

でも、弱すぎる

「あんたら邪魔」

と言って三人くらい同時に殴った

男達は「ぐはっ？」と言って倒れた

ふと、一夏の方を見ると「ぐっ？」と言って倒れた。男の手を見るとスタンガンが握られていた

「てめえら、よくも一夏を？」

「おっと動くなよ。こいつがどうなっても良いのか？」

「くっ！」

その時、後ろから思いつ切り殴られ、意識が飛びそうになった時、ネックレスから何が流れてきた

「何だ？これは？」

微かに聞こえる、私を呼べと言う声が

そう、その名も『双月』（そうげつ）

その名前を呼んだ瞬間、俺の体は光に包まれた

「何だこれは？」

ふと気がついた時には意識がハッキリしており、俺の体にISが展開されていた

「すっすげえ？これが俺のISか」

などに関心しているといきなり男達が顔を真っ青にして逃げていった

「チッ！あいつら」

と思い追いかけようとしたが、一夏を放っておくこともできないので一夏を起こしてサッサと帰った。

無論ISは誰にも見られない様にした

帰りに「あいつらどうしたんだよ？」と聞かれたので「何か逃げた」と適当に話ながら帰った

夜、一夏とテレビを見ていると突然「街に謎のIS現る？」というニュースが流れた

しかもよく見ると俺の顔も映ってた

「一夏」

「何だ？」

「何も聞かないでくれ」

「わかった」

「じゃあ俺もう寝るから」

「わかった、おやすみ」

「おやすみ」

次の日の朝、政府の人間に連れていかれ色々させられた。疲れて説明したくない

そして、何故か俺までIS学園に入る事になってしまったのであった
そして、一夏は内心「よかった」と思っていたのは秘密である

いや〜やっと思登場かよ？何か遅くね？（後書き）

いや〜にしてもどうでしたかお二人さん？

「まあ、俺は双月が出たからもう、満足したけどな」

「俺はもっと何かしたかったな」

そうですねか〜そういえばお二人さん、次はとうとうIS学園に入る
んですよ？

羨ましいな〜

「それでもないだろ」

「そうそう」

そんなもんなんですかね〜

「そうだよ」

じゃあ、しめて下さいねー

「感想やコメント待ってるぜ」

IS学園か……つらいな(前書き)

「作者」

……

「おい、作者！」

何ですか？

「更新するのが遅いんだよ！」

こっちも忙しいんですよ！

「これだから、ダメ作者は」

ダメ作者言つな！

「はいはい。それでは、本編をどうぞー」

IS学園か・・・つらいな

政府の人間が来てから数ヶ月がたった・・・

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

黒板の前でにつこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生（さつき自己紹介していた）

身長はやや低めで、生徒のそれとほとんどが変わらない。しかも服はサイズが合っていないのかだぼつとしていて、ますます本人が小さく見える。また、かけている黒縁眼鏡もやや大きめなのか、若干ずれている。

なんという、不自然さ・・・というより無理してる感じがするのは俺だけなのか？

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「・・・・・・・・・・」

ちよつとうるたえる副担任がかわいそうだが、俺は特に反応する気はない。頼んだぞー一夏。て無理か・・・何で？かつてそれは俺と一夏以外のクラスメイトが全員女子だからだ。

しかも一夏の席は真ん中&最前列だからだ。えっ？俺は違うのかだつて・・・俺の席は窓際の最後列だから余裕なのだ。おっ！一夏のやつ俺と同なじ列にいるポニーテールの娘に救いの視線を出してるよ。しかも無視されてるし。可哀想なやつ。

「・・・・・・・・くん。織斑一夏くんっ」

「は、はい？」

あーあ、あのバカいきなり名前を呼ばれて声が裏返ってるよ。案の定、クラスの何人かはくすくすと笑ってるし。俺もだけど。

「あつ、あの、あ、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

何で山田先生はあんなにぺこぺこ頭を下げているんだろうか？というかこの人は本当に年上なんだろうか。同じ年といわれれば受け入れてしまいそうだ。

「いや、あの、そんなに謝らなくても・・・っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ！」

一夏のやつドンマイだな。先生の行動のせいでさらに注目集めてるよ。おっ喋りだな。

「えー・・・えつと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

（おいおい、『これで終わりじゃないよね？』的な空気がながれるぞ！どうにかしろ一夏。このままだと『暗いやつ』のレットルを貼られるぞ！）と俺は心の中で思っていた。

そう思った瞬間一夏は思いつ切り

「以上です」

と言ってクラスの女子が何人かずつこけていた。(もつとまともな事言えよ!)と思ったとき、パアッ!と豪快な音がした。どうやら一夏が頭を叩かれてたようだ。

「いつーー?」

「……………」

何故か一夏がおそろおそろ振り向きこつ言った

「げえっ!関羽?」

俺も声に出してツッコもうとしたが、なんとか我慢した。そしたら先生が

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」と言っていた。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか?」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな」

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

なんとという暴力宣言。本当に先生なのかこの人？悪魔なんかではないだろうか？
だがしかし、教室には困惑のざわめきではなく、黄色い声援が響いた。

「キヤー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「笑ってるし、お姉様にあこがれてこの学園に来たんです！北九州から！」
いや別に南北北海道でもいいitaro。

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

なんかきゃいきゃい騒ぐ女子たちを見て先生飽きれてるよ。そして最後のやつは命を大切にしろ。

「・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだな。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

「きゃああああっ！お姉様！もっとし買って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をして〜！」

おいおい女子たちが何か凄いことになってるぞ。そして一夏が混乱してるぞ。なんでだ？

「で？挨拶も満足にできんのか、おまえは」

「いや、千冬姉、俺はー」

「パンツ！本日三度目。痛そうだな。」

「織斑先生と呼べ」

「・・・はい、織斑先生」

あー、なるほど。あいつ姉ちゃんが何処に居るか分からないって言うってたな。

ていうか、そのやりとりまずいんじゃないね。

「え・・・？織斑くんって、あの千冬様の弟・・・？」

「それじゃあ、男で『IS』が使えるのも、それが関係して・・・」

「ああつ、いいなあつ。代わってほしいなあつ」

（何か一夏に低温の視線が・・・）

なんて思っていたら、チャイムが鳴った。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

（本当に先生なのか？）とまた、思ったのだった。

「あー・・・」

なんというか、これは精神的にくるものがあった。というか一夏はもうギブ状態だった。

「・・・」

一時間目のIS基礎理論授業が終わって今は休み時間。けれど、この教室内の異様な雰囲気はどうにかならないものか。

ちなみに、IS学園ではコマ限界までIS関連教育をするため、入学式当日から普通に授業がある。学園の案内？地図を見るってさ。酷くない？まあ別にいいんだけど。

(だがしかし、どうにかならないのかこれは・・・)
俺たち以外全員女子。しかもこの学園全体がそうなのだ。

ちなみに俺と一夏は世界的にもニューズになり俺たちを知らない人はこの学園にはいないのだ。

というわけで現在、廊下には他のクラスの女子、二、三年の先輩ら

が詰めかけている。

しかもなかなか俺たちに話しかけると言うことしない。それはクラスの女子も同じで、『あなた話しかけなさいよ』的な空気と『ちょっとまさか抜け駆けする気じゃないでしょうね』的な緊張感が満ちているからだ。

(そして、今の状況なわけだが)

近くの女子を見ても視線をそらすし。しかも『話しかけて!』という雰囲気はそのままだよ。どうせいつちゅうねん。

(誰かこの状況を助けてくれ……)

そう思った瞬間に一人の女子が話しかけてきた。

IS学園か……つらいな（後書き）

さっさと次回予告お願いします。

「わかったよ。次回はセシリアとの決闘だ」

「セシリアは強かったな」

「一夏、お前負けてたよな」

「お前は勝ってたよな」

はいはい、二人ともネタバレはやめましょうね

「わかったよ。それじゃあ、じゃあ、しめるか一夏！」

「ああっ！」

「感想やコメントまってるぜ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7212z/>

IS(インフィニットストラトス)転生した後は・・・

2012年1月4日02時45分発行